

超高齢社会課題研究所 プロジェクト研究所報告書
令和3年3月1日～令和4年2月28日

令和4年4月30日
所長 須藤 智

超高齢社会課題研究所では、高齢者を対象とした人の研究を中心に行っているため当該年度はパンデミックの影響を大きく受け、実際に高齢者の方々に対する対面の調査等を縮小実施した。一方、社会のデジタル化は大きく進み、デジタル技術の新しい超高齢社会の課題が浮き彫りとなっており、それらの課題に対して地域の高齢者の方々とリモートを活用し課題を発見する研究を進めた。研究成果は以下の通りである。

(1) サービスを利用するための情報機器（スマホ、タブレット等）の高齢者対応に関する研究

パンデミックの影響によって急速に進んだシニア層のデジタルデバイドの解消に関する研究を中心に行った。具体的には、高齢者の社会活動のデジタルロランスフォーメーション（DX）の受容に関する研究を継続実施した。

具体的には、シニアコミュニティにおける社会活動を支える Web システムを R1 年に構築し、それらのシステム改善をシニアメンバーの方々と進め、デジタルデバイド、システムの高齢者対応を検討する研究を行った。コロナ禍のシニアのオンライン上でのコミュニティ活動について第 38 回認知科学会大会において口頭発表を行った。

(2) 高齢社会に関わる社会課題解決（コミュニケーション、健康、安全・安心問題等）のソリューションの高齢者対応に関する研究

1 つ目の研究として、R2 年度に行ったエイジズムの若年者の特性についての研究報告を第 85 回日本心理学会大会にて研究報告をおこなった。二つ目の研究として、新しく共同研究先となったメーカー企業との共同で、小型エンジン付き機器の使い方の学習についての高齢者の特性に関する共同研究をおこなった。研究成果については R4 年度に報告予定である。

(3) ステイクホルダーが協働して社会課題解決をおこなうコミュニティ（リビング・ラボ）に関する研究

当該報告期間では、コロナ禍のリビング・ラボの活動として、シニアの居場所活動に関して、シニア自身が自ら居場所活動を行うための方法と、そのような場所に参加するための要因についての調査研究を行った。研究成果については R4 年度以降に報告予定である。

また、研究所メンバーの鈴木宏幸客員准教授を招き、静岡健康長寿フォーラム（11月26日）にて学術セッション「シニアの社会参加の意義と社会実装」を企画・実施した。

(研究業績等)

1. 須藤智 (2021) 第 4 章第 2 節 超高齢社会における人工物のユーザビリティ向上の必要性とその手法, 技術情報協会 (編) 人の感性に寄り添った製品開発とその計測, 評価技. pp203-210.
2. SNS 等の新しいメディア利用状況と批判的思考の個人差が若年者のエイジズムに与える影響 日本心理学会第 85 回大会 (2022 年 9 月) ポスター発表 [発表者] 須藤 智、矢ヶ部 五朗
3. コロナ禍と DX で私たちの生活はどう変わった/変わるのか? 高齢者コミュニティのデジタル化を事例に考える 日本認知科学会第 38 回大会 (2021 年 9 月 5 日) 口頭発表 [発表者] 須藤智

研究経費：共同研究 1 (¥1,000,000) ,共同研究 2 (¥500,000)